

国語の授業—アクティブな学習意欲を引き出す「7つのヒント」

"7HINTS" for a Teacher to Get an Students' Active Desire to Learn in JAPANESE LANGUAGE CLASS

溝口 繁美

要旨

新しい「学習指導要領」が告示され、アクティブラーニングの導入の下、より主体的で、より深い学びが求められている。そうした中、個人的にというよりは、クラスを中心としたグループでの共同の学びや、教科間、学年、地域といったものとの連携を視野に入れた、学習上の工夫・改善について、1) 質問を分ける、2) 生徒を指定する、3) 質問を板書する、4) 学校行事を利用する、5) 書かせる用紙を工夫する、6) 辞書を引かせる、7) 「フリーソフト」を利用するという7つの点について、その考え方や効果について、簡潔に述べた。

キーワード：優しい 授業に生かす モチベーション 地域 アクティブ 意欲

はじめに

アクティブラーニングということが言われ、生徒の自主的・主体的な学習の必要が強調される時代となりました。今までの講義一辺倒の授業ではなく、生徒が考え発言し議論することの重要性が言われています。勿論講義が悪い訳ではなく、生徒に基本的な知識や考え方を教えるのに最も基本的な教授法であることに変わりはありません。ただ、塾や予備校でさえ、「教えない」ことをうたい文句に、自学自習のシステムを売り物に、多くの生徒を集めようとする時代です。我々自身が何時までも旧態依然とした授業方法の上で安穩としているわけには行きません。生徒や保護者の考え方、時代の変化に応じて変えるべきは変え、新しく身に付けるべきは身に付けて行かなくては、しっかりとした授業、国語教育は出来ないものなのです。

それでは、生徒の意欲を引き出し、今風の生徒からそれならやってみようという気にさせる授業とはどのようなものになるのでしょうか。それは、先に言いましたように、今までの授業を180° 転換するような、そんなとんでもない変更を加えたものにすることはしないのです。今までの授業にちょっとしたひと工夫を加えて、生徒のやる気を引き出し、積極的に考え、発言し議論する生徒に変えてみませんか。

1 ヒント1「質問を分ける」

授業している時に、「はい〇〇さん、これについてどう思いますか。」というのはよくやる質問です。あなたの授業では、生徒にこう聞いた時、生徒からすらすらと意見が出てきますか。余程優秀で意欲的な生徒は別にして、たいていの生徒は、恥じらい勝ちに自信なげに立ち上がり、二度三度と先生が促して初めて、ぼそぼそと意見を言うのではありませんか。

神戸親和女子大学文学部総合文化学科 教授

だけど、考えてみてください。その生徒の姿はちょっと考えれば、研修会や講演会でいきなり指名された先生ご自身の姿ではないでしょうか。先生が授業する教室では、毎日生活を共にする見慣れた仲間がいますから、全然知らない初対面の人と同席している研修会等よりは、心理的ハードルははるかに低いと言えるでしょうが、それでも先生ご自身の中学生、高校生の時の自分はもっと胸を張って、何時でも手を挙げて発言していたと言えるでしょうか。多分国語が苦手な生徒より大分ましかも知れませんが、それでもそうした生徒と似たような所があったのではないのでしょうか。

このことを考えるときのヒントは二つあります。一つは小学校低学年の時の自分、あるいはもっと幼い時の自分はどうだったかということ。もう一つは心理的な成長ということです。

前者を考えてみれば明らかなように、小学生の頃はおそらく「はいはい。」と元気に競って手を挙げていたことでしょう。では、それは何故ですか。それは一つには積極的な自分を前向きに評価してもらおうと、余分な気づかいをしないからです。中・高校生になるとてらいや余分な意識など、素直に自分を出せない心理的抵抗が生まれてきますが、小学生ではまだそういったものが少なく、自分の気持ちを前面に出して行動できるからです。もう一つの理由は、教師の質問が出来るだけ多くの児童が答えることが可能なように、聞いている内容をだれにでも分かる、答えやすい質問にしているからです。

つまり、ここでいうヒントの1は、「優しい質問」をするということです。優しいは「易しい」ではありません。教師が生徒に問いかける質問を、一般的に授業で出される形態のものではなく、相手が答えやすい、考えやすい質問に変えてやるということです。

先程の例でいえば、「これについてどう思いますか。」ではなく、例えば「主人公を犬や猿ではなく、どうして猫にしたと思いますか。」という風に、幾つかの選択肢との比較の中で考えさせる形にする。あるいは「家で猫を飼っている人はいますか。」と問いかけて、その猫に対する生徒の気持ちを聞いてから、「あなたの家の猫と、この作品の中に描かれている猫とどちらが好きですか。」という風に水を向けて行く。

教師が出す質問を、生徒がより身近に感じ、記述式ではなく選択式の問題に変えて選ばせるようにするのは、教師は、「生徒が分からないことを教える」者だと考えがちですが、本当は「考える道筋をつけてやって、自ら解答を考え出せるように導く」のが教師の仕事ではないのでしょうか。最初から入試の記述問題のような質問をされて、すらすら答えられる生徒というのは、そう多くはないでしょう。それは余程国語力のある生徒で、最近の子供たちを取り巻く言語環境からすれば、それを望むのではないものねだりに近いように思いますがどうですか。

2 ヒント2「生徒を指定する」

次のヒントは、心理的な成長ということです。小さい子供たちは、色んな事に興味津々。地を這う蛇だろうが、飛んできたスズメバチだろうが、何にでも手を出し、口に入れようとします。それが、小学校高学年になり、中学・高校と進むにつれて、用心深くなり、不必要な時にはあまり話さなくなり、感情が表に出るのを隠そうとするようになります（注1）。これは当たり前のことで、そういう成長過程にある生徒に、授業の時だけは明るく朗らかに前向きに答えなさいというのは、少し無理があるようです。ですから、そういう生徒の状態を考えてする

一工夫は、当てる人間を決めておくことです。また、別のやり方は、当てる順番を決めておくことです。

当てる人間を決めるとは、国語の力はあるのに、控え目であまり前に出たがらない、だが、失敗や間違いをしてもそれを平気で乗り越えるような強さを持った生徒。そういう生徒を質問する時のトップバッターに指名するということです。あるいは、国語委員といったものを選出して、その委員には毎時間順番に何かしらの質問をするように習慣化することです。そうすることによって、他の生徒の最初に当てられるのではという、心理的不安感を和らげることが出来ますし、国語の時間はとりあえず何々さんに当たってから私たちに番が回ってくるということで、他の生徒達の指名されるストレスが緩和されます。

また、当てる順番を決める場合には、席順や氏名順、生まれ月や星座の順などが考えられるでしょう。面白いものを取り上げて、その関連で順番を決めてやると、それだけで授業が盛り上がりやすくなるものです。例えば、「昨日は阪神が勝って、先生は非常に気分が良い。それで、今日の質問は野球部から当てて行こうかな。」といったように、かなり理不尽な当て方でも、その方法が面白ければ、生徒たちは授業に乗ってくることでしょう。

最近では、中学校などで一文ずつ一人一人の生徒に読ませる学校もあるようですが、全員に授業に参加させる機会を作るという面で、あるいは生徒の負担を軽減するという意味で、確かに効果はあるのですが、私の見るところでは、少し読む量が少なすぎる気がします。やはり、文章というのは意味深い一文というのものもあるのですが、幾つかの文で構成された一つの段落で一つの内容を構成する場合が多く、そのまとまりで筆者や作者が何を言おうとしているかを考える方が、文の読解という意味では良いのではないのでしょうか。そうした点からいうと、一文ずつ小さく区切って生徒に読ませるとするのは、再考の余地ありと思うのですがいかがでしょうか。

さて話を戻しますと、生徒は当てられる順番が分かっているれば、次は自分が当てられるものと諦めて、前向きな場合は準備をするでしょうし、万一できなくても、今日順番が回って来たのは自分のせいではなくて不運だったんだと思えます。もう少し細工をすれば、次回こんな質問を誰々にするからと予告してやることもよいでしょう。

3 ヒント3「質問を板書する」

私達は、授業内容を整理するためによく板書しますが、それ以外の板書の機能を有効に活用しましょう。あなたのクラスには、「はい、教科書〇〇ページを開いて」、「〇〇さん読んで下さい」と指示して、スムーズに読めない生徒はいませんか。最近の生徒の中には、教師の口頭での指示を理解するのが苦手な生徒や突然言われたことを的確に理解することが難しい生徒がいます。そうした生徒のために、今やるべきこと、こんな所に気を付けて教科書を読まないといけないといった注意点を、板書してあげましょう。例えばこんな風に。「〇〇ページから〇〇ページを読む」、「三つの事例が出て来るので、それを箇条書きにしよう」、「その事例に共通するものは何ですか」といった感じでまず板書をします。そうしてから、「〇〇さん読んで下さい」と指名して読んでもらうのです。そうしたらどうなるでしょう。ちょっとした変化は見えませんか（注2）。

ただ、そんなことは一々面倒臭くてできない。短い時間の中でそれなりの内容をこなさないといけないのに、そんなことを丁寧にやっている暇はないと考える人も多いでしょう。しかし急がば回れで、そうしてきちんとした読みを生徒にさせる、こちらの指示を生徒に的確に理解させ、その通りに行動させることの方が、よく訳が分からないことを不安感の中で好い加減にさせるよりも、授業の効果は上がります。

また、大半の生徒はそういったことは必要ないのだから、理解が出来ない生徒に合わせて、不必要な時間を使うのは勿体ない考える向きもあるかも知れません。しかし、例えば、駅のエレベータが体の不自由な人に役立つばかりでなく、ベビーカーを押しているお母さん、荷物が多くて階段を降りるのが大変な人など、多くの人々の役に立っているように、通常理解力を持つ生徒にとっても、こうしたやり方は、前述した自らの力で正しい解答にたどり着く方法として有効な場合が多いのです。

4 ヒント4「学校行事を利用する」

次の表は、ある兵庫県立高等学校の6月7月の行事予定表です。毎月毎月様々な行事が予定されていて、年間にすると大変な数になります。本当は年間の行事予定表を参考に示したかったのですが、量が多過ぎて出来ませんでした。このように教師は勿論、生徒たちも加わって多くの時間、大変な労力を費やして行事が企画運営されています。この行事を授業に関わらせることは、通常あまりないと思いますが、やはりそれは勿体ないことだと思います。一例をあげてみましょう。7月の終わりに学年別の競技大会が予定されています。どんな種目を行うかは、ほぼ例年のものを踏襲するのですが、その競技の様子や結果を国語の授業に生かしましょう。

どうやって？

平成29年度（2017年）
6月 行事予定
06/16 文化祭①
06/17 文化祭② 両日共、一般の入場はできません
06/23 進路別講演会（3年）
7月 行事予定
07/03 1学期期末考査（～07/07）
07/10 模試（全）
07/11 模試（3年）
07/12 競技大会（2年）
07/13 競技大会（3年）
07/13 薬物乱用防止講演会（1年）
07/14 競技大会（1年）
07/18 保健講演会（2年）
07/20 1学期終業式
07/24 コース体験入学（07/11 締切）←訂正
07/29 短期海外研修（～08/11）

国語においては、話すこと・聞くこと、読むこと、書くことの指導がポイントになりますが、この競技大会をうまく使えば、そうした活動を有機的に関わらせ、生徒の自主的意欲的活動の下で行うことが出来るはずです。その一つの方法は、「競技大会速報版」の作成です。

競技大会前には、クラスで各種競技に出場する選手を選抜すると思いますが、その際に、選手選抜と同時に、「競技大会取材班」の生徒を選ばせるのです。そしてその取材班の生徒たちに、クラスの各競技の成績や選手たちの活躍ぶりを、A4版一枚の新聞に見立てたものに記事を書かせ編集させるのです。競技をしながら取材をし、新聞に

編集するというのは、かなり大変な作業ではありますが、高校生くらいのレベルになると、各クラスにそれくらいのことはこなせる生徒が必ず数人はいるものです。そうした生徒たちにチームを組ませて速報版の新聞を編集させると、こちらが期待した以上のものを仕上げて来ます。

クラスの生徒は勿論喜んで読みますし、作成した生徒たちも生徒たちの感想を聞くことで、満足感を抱くことが出来ます。出来上がったものを、クラス対抗の形で評価してやるとさらにモチベーションが上がるかもしれません。

これは、行事を国語の活動に絡ませた一例ですが、6月23日の進路別講演会の内容報告レポートを作成させる。7月13日の薬物乱用防止講演会の感想を書かせる等、チャンスはいくらでもあると思います。文化祭については、今年のテーマをクラスごとに討議させ、学年ごとに優秀テーマ案を決定し、それを候補として全校生の投票で決定するプロセスを設定することも可能でしょう。また内容面では、地域の文化財を調べる活動ということも重要な要素として取り込めるのではないのでしょうか。私は兵庫県の多可から和田山まで歩いたことがあるのですが、その通り道にある地区ごとには、様々なその地区ならではの文物がありました。もちろん神社やお宮、様々な碑といったものがありますし、有形物として置かれているわけではありませんが、祭りや行事のポスターなどで、地域で受け継がれてきた特色のあるものの存在が示されていました。

一つ例を挙げますと、播但線と別れて川筋へ入っていくある地区の橋のたもとに、小さな祠があるのですが、その祠から先に細い道が続いています。祠の前には説明板があり、それが生野まで続く昔の街道であり、何々天皇も通った道であること。また現在の生野の地名は、昔は全く別の名前であったことなどが記されていました。無学の私には、全く初めて知ることばかりで大いに驚きなるほどと感心させられました。こうしたことは地元の人達にとっては当たり前のことで、誰でも知っていると言われるかもしれませんが、ことを子供レベルにするとなかなかそう簡単にはいきません。アユ釣りで有名な川のそばにある小学校では、子供たちに釣りの経験がないので、その川の漁協の人たちに釣りの指導をお願いしているというような状況がありました。

地域に伝わる様々な文化を知することは、指導要領で指示する国語科教育の大きなポイントでもありますし、そのいわれを伝える文章や碑文を読むことは、古文漢文の授業の実践的活用ともいえましょう。漢文調で書かれた石碑の地域のいわれや偉人、農地の整備や土地のいわれを、授業で習った古文や漢文の知識を生かして、自らの力で少しでも読み解いていく活動は、大いに生徒諸君の意欲を喚起し、達成感を与えるものだと思いますが、如何でしょう。

例年通りという形で、何気なく過ぎて行く種々の学校行事を、国語教育のアクティブな活動の場という観点から見直すと、多くのチャンス、活用方法が見付かるように思います。是非、地域の活性化、地域との協力による学習活動の深化ということをも見据えて、活かしてもらいたいと思います。

5 ヒント5「書かせる用紙を工夫する」

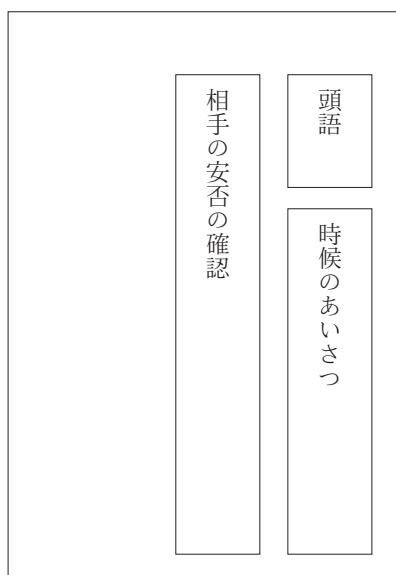
生徒に文章を書かせるとき、みなさんはどのようなものに書かせるでしょうか。ノートに決まっているじゃないかと言われる方が多いかも知れません。しかし、そこにちょっとした工夫をしませんかというのが、私の第5番目の提案です。

新学期になると、学校で使用するノートが多く店頭に並びます。私たちが子供のころお世話になった（よく書かされた）百字帳も棚に並んでいるのを見ると、懐かしいと同時になんと

く嬉しい気がします。毎日日課のように書かされ、なんでこんなにと嫌になることが多かったのですが、今から考えると、あの百字の練習というのは、今の自分の漢字力の基本をなしていると大いに感謝しています。また、あの単純な百字分の枠を取っただけのノートですが、あそこに見知らぬ字を何回か書いて埋めていくというのは、当時の子供の潜在的意欲をうまく引き出す仕掛けではなかったかと思うのです。最近は学校もいわゆる多忙化で、ああいう基本的なしつけ訓練をする暇と余裕がなくなって、あまり百字帳は活用されていないと聞くのが寂しいし残念です。

まあ、百字帳は我々の頃の思い出の品なのですが、最近のノートを見ると本当に種類が多いです。それらは、いろいろな観点から、それぞれの教科の学習やまとめがしやすいように工夫され、使いやすく児童生徒がほしいと思うような出来栄えとなっています。

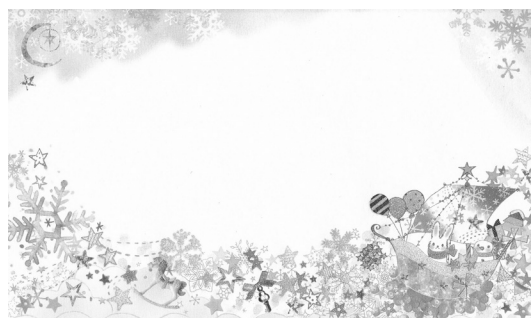
これと同じことが、生徒にどのようなものに書かせるかということの工夫につながる考え方になると思われます。



左は、教育実習でお世話になった先生、学校に対するとりあえずのお礼の葉書を書かせる練習として、学生に渡した葉書の裏面の例です。白紙の状態で、同じものを書けと言っても、おそらく彼らは戸惑うばかりで、時間をかけてもうまく書けないし、自分でも納得できるものとはならないでしょう。

それをこのように、全体の構成を分かりやすく区切ってやり、枠内の部分は、手紙や葉書を書くときの常識的・定例的な文言で埋めさせ、残りの部分に自分の安否とお世話になったお礼を書かせるようにしました。そうすると、彼女達は分量がかなり制限されていることもあって、意欲を持って書くことに取り組み、なかなかコンパクトにまとめた、自分でもそれなりに評価できる礼状に仕上げました。

さらに、下に示した用紙は非常にカラフルな色合いが用いられた、今風の学生が言うところの「カワイイ」メッセージ用紙です。



母の日を前にした講義の日、この用紙を学生に配り、普段は正面切って言いにくい、お母さんへの「ありがとう」の気持ちを書いてみようという提案した時、学生たちがどういう反応をしたかは、みなさん容易に推測出来ますでしょう。恐らく思われた通り、彼女達は嬉々として母への感謝を認め、持ち帰っていきました。さらに、余りの用紙が欲しいと言って来る学生が何人もいた状況でした。

今時、無味乾燥な白紙の用紙に、思うことを書きなさいと、殆ど何の指示もせずに書きなさいと言う教師はいないと思いますが、こうしたちょっとした工夫が、ちょっと面倒で余分なという所もありながらも、効果的ということをもう一度考えてみてはどうでしょう。

6 ヒント6「辞書を引かせる」

教育実習の関係で学校訪問をさせていただくと、ある中学校には、教室備品のように10冊程度の国語辞典を置いてある教室があります。なかなか良いことだと思うのですが、残念ながら使用している感じがありません。折角用意してあるのになんとも惜しい気がします。私の講義で「間の文化」(注3)という文章を扱ったことがあります。これなどは、こういった辞書の活用に打って付けの教材だと思います。この文では、間というものを空間的、時間的、心理的距離のことであると説明し、そしてその日本独特の文化的役割を解説しています。文章の中でも、「隙間」とか「間延び」とかいった言葉が紹介されますが、この場合、教室に備えられた辞書を活用し、この「間」を含む言葉を、国語辞典を使って生徒たちに調べさせると面白いと思います。この場合、全員分の辞書がないのではないかと心配される方がいるかも知れませんが、そんな必要はありません。むしろ全員分はない方が良いでしょう。二人一組、三人一組といった生徒の組み合わせを作り、時間を切って共同して調べさせれば良いでしょう。その方が、一人で辞書を繰って言葉を選び出すよりも、何倍か生徒は辞書を引くことを面白がり、熱心に言葉探しをする事でしょう。つまり、ここでのポイントは、それぞれの組でどれだけ沢山の語を見つけ出すことが出来るかを競争させることにあります。

大学で、学生にやらせた時もそうでしたが、面白いのは、単純にマ行のページを開いて、「間」なんとかという言葉を熱心に調べるグループがあるばかりでなく、その中に「居間」とか「京間」あるいは「〇〇間」のように、それこそ「間」を含む言葉を別の角度から工夫して調べ上げるグループが出て来るのです。競争の中で、調べた「間」を含む語の数が大きく増えるばかりでなく、生徒の着眼点の広がりやその面白さを生徒同士が実感することが出来ます。こうしたことも、グループ学習の効果といえるでしょう。

7 ヒント7「フリーソフト」を利用する

読みに力点を置いた授業では、黙読も大切ですが、やはり声に出して読ませる機会を作ること大切だと思います。姿勢を正し、作品情景や主人公等の気持ち、場面の盛り上がりなどを、身体全体を使って、しっかりと自分の声で表現することは、身体のような部分を活性化すると同時に、作品や文章を強い印象を伴った記憶として残すことになります。

その声を出すには、発声に関するちょっとしたトレーニングをすると、随分違ってきます。放送部の諸君が良くやる、発声練習はその一つでしょう。「アエイウエオアオ」の調子で各行の音を発生する練習。「にはにはにはうらにはにはにははとりがいる」といった早口言葉を繰り返すことは、自分の声をしっかり出し、調子を上げる上で、馬鹿にできない効果があります。また、最初馬鹿にしていた生徒たちもだんだんその調子になれて来ると、大いに楽しみながら恥じらうことなくしっかりと声を出すことが出来るようになります。

また、朗読を聴かせることにより、どのように文章を読めばよいか見本を手に入れることも出来ます。最近はいくさんの朗読がネット検索をすると出て来て、実際の朗読を手軽に聞くことが出来て便利です。そうしたものを聞かせることによって、生徒の読むことに対するモチベーションをあげることが出来ます。

先日、NHK テレビの朝のニュースで、サンマの漁獲枠を中国や台湾など最近漁獲量が増え

てきた国々とうまく設定できるかどうかという話題が取り上げられていました。その中で、「公海」という言葉を話すアナウンサーの発音が「後悔」と同じアクセントであるのに驚きました。まさか私の聞き間違いではないと思うのですが、最近 JR の車内放送でも、駅名を言うのを聞く時に違和感を覚えることが多いです。同音異義語の多い日本語では、その読みをどう伝えるかは大きな問題と言わざるを得ません。辞書の中には、アクセント辞典といったようなものもありますが、より便利で分かり易いものとして、ネット上に無料で公開されている、「わいわいにほんご」と「OJAD」とを紹介しましょう。

「わいわいにほんご」は、北海道の日本語学校「わいわい教室」が作った、音声の出る日本語学習サイトです。ホームページを開き「日本語テキストの読み上げ」というボックスに、適当な日本語を打ち込むと、それを標準的なアクセントで読み上げてくれる便利なサイトです。また、「OJAD」の方は、online Japanese accent dictionary の頭文字を取ったもので、国立国語研究所・共同研究プロジェクトの成果物で、日本語教師・学習者のためのオンライン日本語アクセント辞書です。こちらには、単語検索、動詞の後続語検索、任意テキスト版、韻律読み上げチュートスズキクンの四つの機能があります。簡単なのは、単語検索のページを開き、適当な単語（動詞）を「単語の検索」のボックスに入力すると、男性か女性の声で、12 種類の形態に分けたひな形に従って単語を読み上げてくれます。どちらも無料で比較的簡単な操作で、一般的な語の標準的な読みを聞かせてくれるので有難いものです。いずれも基本的には外国人が日本語学習をするための補助として役立つものなのでしょうが、われわれ一般の日本人でも、先程例に出した「公海」、「後悔」、「公開」といった同音異義語の発音を確かめるには便利なツールです。

昔は、日本語の標準的発音ということも、小学校の授業などで行われていたように思いますが、最近ではそのようなこともなくなっているのではないのでしょうか。もちろん、土地土地には方言というものがあり、そういったものが持つ独特の情緒なり、役割を否定するものではありませんが（注 4）、日本語の基本的な発音やアクセントというものも、確実な意思疎通のためには、きちんと身に付ける必要があると思います。日本語を母語としない外国人が学んだ日本語の発音の方が、日本で育って普通に日本語を喋っている日本人より、美しいというような、変なことにならない為にも、折に触れ、このようなツールを使って自身の発音を確認する作業が必要ではないのでしょうか。

また、もう一つ最近気になるのが、漢字の筆順ということです。生徒ももちろんですが、教授者である私たちも、何でもワープロに頼り、字を書くことが少なった今日、改めて問われると、意外な漢字の筆順にエッと戸惑うことがあるのではありませんか。そうした場合にも、ネット検索で見つかる漢字の筆順ソフトは、大いに助けとなってくれます。（注 5）

これらのツールは繰り返しになりますが、簡単な操作で利用することが可能なので、生徒たちが気軽に利用し、自身の発音をチェックできるだけでなく、そうした発音やアクセントに対する意識や関心を高めるのに大いに効果があると思います。是非試してみてください。

おわりに

オーソドックスな授業の準備は、きちんとした教材研究とそれに基づく学習シートや補助教材の準備になるわけで、それで授業を進めて何も悪いことはありません。しかし、そうやって一所懸命授業準備をし、実際の授業に臨んだところが、私たちが今日はなかなか生徒の食いつきも良く、生き生きした顔つきで授業に参加してくれ、生徒の大半がうなずき、こちらの言うことに理解を示してくれていたと思える授業が、どれほどあるのでしょうか。

もし、しっかり授業準備をしたはずなのに、思うような手ごたえがないとすると、その授業準備に問題があるのでしょうか。あるいは、自身の国語教員としての資質に問題があるのでしょうか。悩むところです。

授業がどうも思い通りの成果を得られない場合、私は、その大半は授業の準備の在り方、私たちの教員としての資質に問題があるというよりは、ちょっとした気配り、工夫の不足に起因しているのだと思います。

せっかく生徒たちの顔を思い浮かべながら、この教材では是非ともこういうことを考えさせたい、議論させたいと一所懸命準備をしたとしても、当日、授業へのちょっとした入り方のまずさ、間の置き方、問題提示の順序の悪さといったものが災いし、せっかくの準備が水の泡ということもままあるではありませんか。

オーソドックスな授業の準備が、木の幹なら、今回紹介した「ちょっとしたヒント」は、その枝葉です。でも、現実の木々の存在や生育の過程がそうであるように、意外にもその枝葉が木の風貌に大きく影響し、木全体の栄養補給を大きく左右するのです。

普段の忙しい勤務の中で、枝葉末節なこまごましたことにまで気を配ることは、なかなか難しいことではあります。しかし、そこにちょっとした工夫、水やりをしてやることで、予想以上の効果が起こることがあるのです。そうした経験を、多くの先生方に是非していただき、生徒自らの学習意欲の向上、主体的な学びの開発へと繋げていただきたいものだと思います。ここに述べさせていただいたヒントが、少しでもそうしたことの「ヒント」になれば幸いであると思っています。

(注1)「教育のための発達心理学」山川範子、山本真市、倉智佐一共著、創元社、p.191～第3章青年の心理的特質 1977年4月。

(注2)「通常学級のユニバーサルデザイン スタートダッシュQ&A55」阿部利彦編著、2017年9月。

(注3)「間の文化」長谷川権(『国語3』三省堂)2015年3月。

(注4)声に出して読みたい日本語が評判になり、様々なところで取り上げられたが、その中で、方言の衰退に危機感を持ち、その力を再確認する意味で出されたのが、『声に出して読みたい方言』(齋藤孝著 草思社)。太宰治の『人間失格』や川端康成の『雪国』などが、各地の方言で読まれ、独特の雰囲気醸し出している。

(注5)漢字と筆順というキーワードで検索すれば、各種の有料、無料のソフトを知ることができる。画面上に筆順が順次示されるものや手でなぞることができるソフトもある。多くの場合、筆順と同時に漢字の画数も確認することができるので便利である。